

令和元年6月19日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07245

研究課題名（和文）帝国日本を移動する社会的弱者の救済に関する思想史的研究

研究課題名（英文）A Study of Intellectual History on Salvation of Socially Vulnerable People Moving in Imperial Japan

研究代表者

金津 日出美（KANAZU, Hidemi）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：40802103

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：帝国日本における社会的弱者とその対応に関して日本本国での動向と植民地朝鮮・台湾の動向を対照することで、帝国の人的移動と社会的弱者の様相、社会事業政策を総体的に把握した。具体的には『朝鮮総督府統計』「行旅病死」統計の具体的実態にせまるため、『朝鮮総督府官報』における「行旅死亡人公告」を収集・整理した。この作業により、統計数値には表れない「行旅死亡人」の性別・年齢、死亡地、埋葬法等の情報が得られた。また、植民地朝鮮における社会事業政策、その思想分析を行い、植民地での伝統的救済思想・慣行と近代的救済思想・政策が補完、せめぎあいつつ展開する、帝國的救済の非対称性について分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

植民地統治や社会事業の近代化という視角から捉える従来の研究に対し、境界を越えて移動し斃れた「行旅病死人」に着目することで、資本主義の展開による労働力移動によって、本国・植民地間は無条件に朝鮮内部をも移動した人びとが、近代医療、伝統医療のみならず、地域社会の救済機能からも零れ落ち、夥しい病と死に見舞われていたことを明らかにした。また近代救済思想を従来の儒教や仏教的救済思想、地域共同体の救済慣行との関連において分析した。グローバル化の進展により国境を越えて生起する「貧困」「格差」の解決を模索するにおいて、境界を移動する人びとに対する救済の問題点と可能性を探る本研究は、重要な視座を提供するといえる。

研究成果の概要（英文）：This study is about the socially vulnerable in Imperial Japan and its countermeasures. And by contrasting the trend in Japan with the trend in colonial Korea and Taiwan, I comprehensively grasped the human movement of the empire, the appearance of the socially vulnerable, and the social welfare policy. First, in order to supplement the data of "Korea Governor General Statistics", I collected "Travel Death Notice" published in "Korea Governor General Gazette". Through this work, information such as sex, age, place of death, burial method, etc. of "travel dead" was obtained. Next, I analyzed social welfare policy and social welfare thought in colonial Korea. In this analysis, I analyzed the asymmetry of imperial remedies, which progressed while conflicting traditional remedies practices and modern welfare policies in the colony.

研究分野：日本思想史、東アジア文化交流史

キーワード：植民地朝鮮 社会的救済 社会的弱者 国際移動 帝国日本

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

平成 28 年度より研究代表者は科学研究費補助金「行き倒れに関する国際的比較地域史研究 移動する弱者の社会的救済・行政的対応の分析」(基盤研究(B)、研究課題番号 15H03247、研究代表者:藤本清二郎)の連携研究者として、植民地朝鮮における「行旅病死者」に対する行政対応や医療・救済状況の実態とその思想史的分析に従事してきた。それらの成果は、「植民地朝鮮の行旅病死者と宗教団体」(『韓国宗教』第 41 輯、圓光大学校宗教問題研究所[韓国]、2017 年 2 月)、「植民地朝鮮の行旅病死者とその行政的対応」(2017 年度全州大学校韓国古典学研究所重点研究所国際学術大会「近現代東アジア儒学伝統の変容と地域共同体の再編」、2017 年 3 月)「植民地朝鮮における「行旅病死者」、その状況と対応」(第 54 回部落問題全国研究集会、2016 年 10 月)などの論文・口頭発表により公刊・公表してきた。韓国・高麗大学校在職中に従事しはじめた科学研究費補助金による国際共同研究を通じて、近世・近代日本の「行き倒れ」と移動する弱者に関しては無論のこと、清代中国、イギリスにおける救済法制やその実態についての知見を深めるとともに、国内外の関連研究者との議論、意見交換を行うネットワークを構築することができた。また、研究代表者は韓国・国立中央図書館、国家記録院、高麗大学校図書館、釜山市立図書館、全州大学校韓国古文献研究所等が所蔵する、当該テーマに関わる史料収集に努め、そのデータ集積と紹介を行ってきた(一部については上記論文に掲載した)。

これらの研究を通じて、植民地朝鮮における「行旅病死者」の発生状況やその行政対応、救済団体の動向は近代日本のそれとはかなり異なるということや、他方で、植民地台湾との共通性があるということを示すことができた。また、従来、ほとんど言及されることのなかった朝鮮半島にわたった日本人「行旅病死者」の存在形態、在朝日本人と朝鮮人の「行旅病死者」の発生状況の共通性と差異、近代医療と伝統医療のダブル・スタンダード下に置かれた朝鮮社会における社会的弱者への救済状況などについて一定程度明らかにできた。しかし、1920 年代以降の朝鮮総督府主導による社会事業政策の本格化については、従来、歴史学や社会福祉学的視点から植民地統治との関連性、社会事業の近代化は指摘されるものの、近代日本で形成された社会事業・救済思想の植民地への移植過程に関する思想史的検討はほとんどなされていない。また、朝鮮社会においては従来、儒教的色彩を色濃く帯びた「郷約」「契」等が地域共同体の救済機能の根幹を成しており、それらの慣行と日本から移植された近代社会事業思想との相剋についての思想史的検討はいまだ手つかずの状態である。「貧困」「格差」が解決すべき課題となっている現在、この問題を検討することは、人びとの生にまつわる認識を捉え直すものである。

### 2. 研究の目的

植民地医学・医療研究と「行旅病死者」などの移動する社会的弱者の実態とその行政対応に関する研究を土台として、帝国日本の社会医療・社会事業思想、とりわけ既存の地域共同体における救済慣行と近代社会事業との相剋を思想史的に解明する。

近代日本の「行旅病死者」については竹永三男氏による一連の研究が発生状況や行政対応を解明しており、植民地朝鮮のそれについては、「精神疾患患者」の発生状況に関する研究(チェ・ギジン氏、リュ・ヨンス氏)、ハンセン病者との関連を見た滝尾英二氏の研究などが存在する。そのほか、植民地朝鮮の社会事業政策の展開過程の分析(慎英弘氏、尹景郁氏、大友昌子氏、遠藤興一氏、河相洛氏)のなかで一部触れられるのみで、本格的な研究は皆無に近い状況であり、東アジア圏域における社会事業の「近代化」の連動性と同時性を指摘した沈潔氏の研究は存在するものの、思想史的方法を用いた研究は圧倒的に立ち後れている。さらに近世・近代の連続と非連続の問題や、地域社会の救済機能との相互補完や対抗については上述した科学研究費補助金による国際共同研究によって歴史学的手法を用いた成果があるが、その伝統的救済思想や近代社会事業思想の相剋関係に関する思想史的分析はほぼ見あたらない。

したがって、本研究では、近代日本において形成された社会事業思想が植民地朝鮮・台湾に移植されるにおいて、どのような作用・影響を与えたのかを実証的に解明し、近代医療と伝統医療(漢方)のダブル・スタンダード下に置かれた植民地の医療状況において、移動する社会的弱者へ向けられた救済思想を分析することが研究目的となる。本研究は、日本・朝鮮・台湾それぞれにおいて行われた社会事業史研究を架橋するとともに、境界を越えて移動する社会的弱者に向けられた当該地域共同体の救済意識を領域横断的に分析し、従来の日本思想史研究の視点・方法・領域を刷新することを目的としている。

### 3. 研究の方法

本研究の中心となる方法は、植民地朝鮮で刊行された文献、新聞・雑誌史料(日本語・朝鮮語を含む)等を、社会事業思想が流入・普及する社会的コンテキストとクロスさせながら行う思想分析である。そのため、(1)朝鮮社会事業協会の動向、機関誌『朝鮮社会事業』掲載記事等を中心とした植民地社会事業関係テキストの思想史的分析を進める。また、植民地期における朝鮮の「行旅死亡者」の状況を(2)『朝鮮総督府官報』掲載の「行旅死亡人公告」(約 2 万件)のデータ収集・整理し、データ分析に着手した。他方、(3)植民地統治開始以前の朝鮮伝統社会における救済機能・思想に関する史資料を収集・分析し、伝統的救済と近代的救済のせめぎ合いを植民地状況のもとに明らかにする。

#### 4. 研究成果

以前より進めてきた植民地朝鮮における「行旅病死」の状況を日本本国と植民地台湾での状況と比較考察し、「行旅病死」の発生における植民地状況を明らかにした。その分析において、(1)日本本国と植民地朝鮮・台湾では、病人・死亡人の発生状況の趨勢において大きく異なっており、後者では病人数よりも死亡人数が圧倒的な比率を占めること、(2)植民地に居住する「内国人」と現地人の発生状況も、人口比を勘案しても、植民地統治期を通じて数値的に大きな懸隔を見せていること、(3)植民地朝鮮における「内国人」の発生状況は移入人口が増加するにもかかわらず、病人・死亡人ともに一定の数値で推移し、その比率は減少していく反面、現地人の発生比率は増加傾向にあること、(4)朝鮮での発生比率は台湾に比べても多く、ことに社会事業政策が本格的に展開する1920年代以降に増加し、1930年代中葉より激増することなどが具体的に明らかになった。そもそも植民地における医療状況は近代医療と伝統医療（漢方）のダブル・スタンダード下に置かれており、植民都市に集中する近代病院・救療施設の治療・救済から零れ落ちていたことを示している。朝鮮総督府は各種宗教団体の救済事業を取り込みつつ「行旅病人」の救療制度を整えていくものの、当時における自己評価とは裏腹の状況が継続していたことが明らかとなった。

また、上記のような統計データの分析を補完するため、『朝鮮総督府官報』掲載の「行旅死亡人公告」（2万件以上）に示される個々のデータを収集し、「行旅死亡人」の人的事項、死亡時の状況、対応主体、埋葬状況などの基礎的データの整理を行った。これにより移動する社会的弱者の末期（まつご）状況の一端が明らかになるとともに、当該期の地域社会における移動者の死への対応に迫ることが一定程度可能となった。

他方、こうした移動する社会的弱者が置かれた状況に対応した社会事業担当者、社会事業家は状況の深刻さを認識しつつも、「円滑な」植民統治、「天皇の慈恵」の浸透を目処とした「成果」を強調していた。また、朝鮮伝統社会における救済慣行を近代社会事業思想から否定しつつも巧みに利用していたことも明らかとなった。なお、伝統社会における救済慣行や前代の移動者（流民）への対応策に関する従来の研究成果について日本語訳し公刊した。

そのほか、帝国日本の圏域を移動する人びとを研究対象にし、その救済知の連環、朝鮮伝統社会と植民地近代権力との相克を重視する本研究では、東アジアにおける研究者間ネットワークとの研究交流・学術交流が欠かせない。本研究期間を通じて企画・開催した研究会やシンポジウムは下記の通りである（一部に本助成金を使用した）。

2017年10月20日：張憲生氏講演（前・広東外語外貿大学）「わが日本史研究修行」、立命館大学

2018年1月8日：国際比較地域史研究会公開研究会、邊柱承氏（全州大学校）「朝鮮後期の流民研究」、部落問題研究所

2018年1月27・28日：東アジア史学思想史研究会国際シンポジウム「東アジア史学史のために」、立命館大学

桂島宣弘氏（立命館大学）「近代歴史学と実証主義の陥穽」

呉炳守氏（東北亜歴史財団）「傳史年史学の興衰」

尹海東氏（漢陽大学校）「植民主義歴史学を越えて 植民主義歴史学のイデオロギーと近代歴史学」

張信氏（韓国教員大学校）「近代日本の朝鮮研究 統計的アプローチ」

鄭駿永氏（ソウル大学校）「国史と東洋史の狭間 京城帝大と「東洋文化研究」」

鄭尚雨氏（翰林大学校）「植民地における帝国日本の歴史編纂事業 朝鮮と台湾の事例を中心に」

辛珠柏氏（延世大学校）「戦後における末松保和の朝鮮史研究 連続と断絶」

沈熙燦氏（立命館大学）「朝鮮史から韓国史へ 東アジアにおける「文化史学」の受容について」

李廷斌氏「北朝鮮の朝鮮古代史研究と金科奉」

2018年10月27日：日韓自国史研究交流シンポジウム「共時的時空間としての東アジア」、立命館大学

姜制憲氏（高麗大学校）「儒教化と韓国文化」

李亨大氏（高麗大学校）「壬辰倭乱と日本人ディアスポラ」

殷暎星氏（立命館大学）「近世日本における郷約の受容 大洲藩における郷約の「発見」と活用」

許智香氏（東京大学）「京城帝国大学予科「哲学概論」及び「修身」教授 横山将三郎の生涯と植民地朝鮮」

邊明燮氏・徐珉珠氏（高麗大学校・院）「朝鮮後期における封建の意味に関する研究」

石運氏（立命館大学・院）「古義堂における『尚書』研究に関する一考察」

洪權惠氏・李炫姫氏・崔有晶氏（高麗大学校・院）「朝鮮明宗代における国王後孫の官職進出様相と特徴一璿源録の分析を中心として」

朴海仙氏（立命館大学・院）「植民地朝鮮における反宗教運動」

2018年12月14日：鄭炳浩氏「植民地時代朝鮮半島における日本語雑誌・二重言語文学と租界都市上海」、立命館大学

2019年1月9日：「トランスナショナルな儒教研究の試み」学術交流シンポジウム、立命館

## 大学

- 張舜順氏（全州大学校）「日帝強占期における総督府の郷約の変容政策と運営」  
殷曉星氏（立命館大学）「近代日本における明清聖諭に関する報告」  
黄泰黙氏（全州大学校）「李海朝の刪正パンソリ系小説の構成に関する特徴の考察 儒教的な価値を中心として」  
松本智也氏（立命館大学・院）「1811年通信との接触にみる近世後期日本知識人の日朝関係認識」  
文瓊得氏（全州大学校）「概念史の方法論としてみた朝鮮後期～開港期における「義理」という概念の変化の様相」  
古文英氏（立命館大学・院）「幕末維新期における陽明学」  
金貞和氏（全州大学校・院）「全羅北道のキリスト教徒における社会的なネットワークに関する研究」

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計3件)

- 邊柱承著、金泰勲訳、金津日出美補訂、講演「朝鮮後期の流民研究」、部落問題研究、査読無、224号、2018、3-16  
邊柱承著、金津日出美・金泰勲訳、朝鮮後期の流民研究(抄録)、部落問題研究、査読無、224号、2018、17-29  
金津日出美、植民地朝鮮における「行旅病死者」、その状況と対応、部落問題研究、査読無、221号、2017、66-85

### 〔学会発表〕(計6件)

- 金津日出美、「天皇制の現在と過去 - 戦後の天皇制をめぐる動向」、2019CAMPUS Asia 上半期人文学名士招請特講、2019年  
金津日出美、飢えて斃れる移動民 - 植民地朝鮮の「行旅病死者」、アジア共同体とディアスポラ講座、2018年  
金津日出美、総括コメント・近世から近代へ、日本思想史学会 50周年記念シンポジウム、2018年  
金津日出美、植民地朝鮮における社会事業と「行旅病死者」、部落問題研究所研究成果報告会、2018年  
金津日出美、天皇制の現在と過去、補足的コメント、高麗大学校 BK21+韓国史事業団講演会、2018年  
華雪、張莉、金津日出美、漢字と書 日中韓のはざまと女性、白川静博士没後十年企画記念講演会、2017年

### 〔図書〕(計2件)

- 金津日出美・桂島宣弘・亜州日本研究組著、盧茂君・李蕊・伊藤孝雄・李君怡訳、日本概況、大連理工大学出版社(中国)、2018、248  
国立海洋博物館編、巖仁卿・金津日出美・片龍雨・柳政勲訳、津島日記(国立海洋博物館翻訳叢書)、民俗院(韓国)、2017、454

### 〔産業財産権〕

#### 出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

#### 取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：

国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6．研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (3)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。